

## 4月4日 復活の主日

使 10:37～43    コロ 3:1～4    ヨハ 20:1～9

### 1. ヨハ

w.3-4 「そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。二人は一緒に走った ……」

初代教会の信者が、主日のミサに集まるときの心の中は、いつも“走って行った ……”と表現するのがふさわしかったのかもしれませんが。日常生活に忙しくて時間が足りない …… という意味ではなくて、ミサは彼らにとって特別に大切な方、復活されたキリストにお会いする、ワクワクするような時であったということです。

「キリストは …… 御自分の死をもって私たちの死を打ち砕き、復活をもって私たちに命をお与えになった」(復活の叙唱 1)ことを記念するミサの祭儀は、実に「キリストの行為であり …… 、位階によって秩序づけられている神の民の行為であって」(ミサ典礼書の総則 1)、私たちはこれに参加するために今も心の中で、喜びをもって“走って行く”のです。

このようなミサがささげられている初代教会の人々にとって、ほんの少し前までは“イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、まだ理解していなかった”のに、今は「信仰の実りとして魂の救いを受けている」(1ペテ 1:9)という実感があったことでしょう。明らかに彼ら信者が、「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました」(コロ 1:13)という信仰を共有していればこそ、このヨハネ福音書のテキストは“感激の物語り”でありました。

もし現代の私たちのミサが、「まだ理解していなかった」(v.9)段階にとどまったままで、ただの宗教的手続きのように行われているに過ぎないとしたら、それは嫌忌すべき猿芝居といわなければなりません。なぜならミサは、私たちがそこで“ことばとしるし”(ミサがわかる／土屋吉正)を通して、復活のキリストにお会いする喜びの宴だからです。

### 2. コロ

v.1 「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。」

洗礼の秘蹟によって私たちキリスト者が、「キリストと共に葬られ、 …… キリストと共に復活させられた」(2:12)ということから離れては、教会が祝う復活節を正しく理解することは決して出来ません。残念なこと、いろいろなところで私たちが目にし耳にする“復活のメッセージ”の多くは、まるで他人事のように、別世界で起こった“感激的な出来事”のようにイエスの復活に言及しているだけで、私たち自身の復活の信仰に関してはほとんど沈黙しているのが実情です。

私たちはかつて「世を支配する諸霊」(2:20)、「すなわち、不従順な者たちの中に今も働く霊」(エフェ

2:2)である悪魔の支配下に生きていました。聖書はその頃の私たちを、「生まれながら神の怒りを受けるべき者」(エフェ2:3)、「神に敵対して」(1:21, ロマ5:10)いた者と呼んでいます。しかるにキリストは「御自分の死をもって私たちの死を打ち砕き」と説明されているとおり(復活の叙唱1)、「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。」(1:13) 実にキリストの復活は、罪と死への勝利(1コリ15:54-56)、悪魔の支配に対する勝利であります(1ヨハ3:8)。この勝利を祝うことは、「キリストと共に復活させられた」(v.1)私たちにとっての、まことに大切な尊い務めです(復活の叙唱1)。

### 3. 使

キリストが「生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた」(v.42)という宣教は、“あなたにどのような慰めを与えますか”という問いを設定して、かの有名なハイデルベルク信仰問答は次のように教えました。“それは、かつて私のために神の裁きに対して御自身を献げ、私からすべての呪詛を取り除き給うたあの裁き主が、天から来たり給うのを、私があらゆる苦難と迫害の中にあっても、首を挙げて待ち望む、ということです。”

「復活の主日から聖霊降臨の主日に至るまでの50日間は、一つの祝日として、また、より適切には“大いなる主日”として、歓呼に満ちて祝われる。“アレルヤ”がとくに歌われるのは、この期節である。」(典礼暦年と典礼暦に関する一般原則22)                      ハレルヤ、アーメン。

## 4月11日 復活節第2主日

使 5:12～16 黙 1:9～19 ヨハ 20:19～31

### 1. ヨハ

v.21-22 「イエスは重ねて言われた。“あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。” そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。“聖霊を受けなさい。”」

聖書を通して今も語られている神のことは、「あなたがた」(v.31)、すなわちすべての人々、とりわけ信じて救われた信者たちに向けられています(使 13:46-48 参照)。“信じる”というキリスト教用語は、洗礼を受けて、聖霊によって新しく生まれた(ヨハ 3:3-7 参照)ことを指しています。人は洗礼によって、イエス・キリストによる罪の赦しと永遠の命の福音を“宣教する者”として、新しく“生きる者”(創 2:7)になって、世に派遣されたのです。

私たちキリスト者が、イエスは神の子メシアであると信じ、信じてイエスの名によって永遠の命を受けている(v.31)のは聖霊の御業なのです。それは、この世の知恵ではありません(1コリ 2:6-16)。

キリストの福音を宣教すること、すなわち罪の赦しの洗礼を人々に宣べ伝えることを(使 2:38)、ほとんどの信者は教導職の専権事項のように勘違いしているようです。カトリック教会のカテキズム 1256 は伝統に基づいて、“誰でも、未受洗者であっても” 洗礼を受けることが出来ると教えています。「誰でも洗礼を受けることが出来ると教会が教えているのは、神はすべての人の救いを望んでおられるし、救いには洗礼が不可欠であるという理由からなのです。」 v.23 が述べている宣教の使命の重大性は、教導職はもちろんのこと、すべての信者にも同様に認識されなければなりません。

聖書を学ぶことは、使徒たちが伝えた福音(ロマ 10:8 以下、1コリ 15:1 以下)を聞くことでなければなりません。それは“作り話”や“無意味な詮索”(1テモ 1:4)に心を奪われることであってはなりません。浅薄な知識を競い合っ、いたずらに攻撃的になる原理主義者は、「聖書も神の力も知らない」(マタ 22:29)連中であって、福音を宣教しようとしているではありませんから、関わりを持たないのが賢明です。

聖書を通して、使徒たちは今も涙を流してキリストの福音を弁明し続けており(フィリ 3:18-21)、復活のキリストはその使徒たちの証言に、世の終わりまでいつも共にいてくださるのです(マタ 28:18-20)。

### 2. 黙

v.20 「七つの星は七つの教会の天使たち、七つの燭台は七つの教会である。」

“七つ”というのは、象徴的な数ですが、同時にここでは具体的な小アジアの教会を指しています。現代の私たちにとって、その秘められた意味(v.20)とは、全世界の教会と共に「死と陰府の鍵を持っている」(v.18)復活のキリストが、いつも共にいてくださるということでしょう。

従来カトリック信者は、その聖職位階制度に目を奪われて、神が共同体と共におられるという事実、どちらかといえば無関心でした。信者がまるで教導職の付属物のような、あるいは教導職よりも次元の低い無知な大衆であるような誤った認識が、漠然と受け入れられていました。

1983年のWCCで採択された“リマ文書”をここに引用しておきましょう。「一方から言えば、この共同体には任職された聖職が必要である。彼らの存在は、神がこの共同体の主導権を取っておられること、また教会の宣教の源泉にいましかつ教会の統合の基礎にいましたもうイエス・キリストに、この教会が依存していることを、共同体に思い起こさせるのである。……そしてもう一方から言えば、任職された教職はこの共同体から離れてはその存在はない、任職された教職は、ただこの共同体の中で、この共同体のために、その召命を達成することが出来る。」

### 3. 使

どうか、原始教会の姿を、あたかも使徒の一人舞台ででもあったかのように誤解しないでいただきたい。そのめざましい活動は、“使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心”(使 2:42)な信者の共同体を生み出していったのです。そのような信者の中から、「“霊”と知恵に満ちた人々」(使 6:3)、「散って行って、福音を告げ知らせた人々」(使 8:4)が続出したのが、原始教会の実際の姿でした。

v.14 「そして、多くの男女が主を信じ、その数はますます増えていった。」

現代の私たちの教会が、内実の伴わない“ただの数”の集まりであってはならないのは当然のことではありませんか。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ 4:25)                      ハレルヤ、アーメン。

## 4月18日 復活節第3主日

使 5:27~41 黙 5:11~14 ヨハ 21:1~19

### 1. ヨハ

私たちは今朝、初代教会における魚のシンボリズムについて、少し学んでみましょう。カタコンベのフレスコ画に、パンと魚が感謝の祭儀の象徴として、たくさん描かれていることは有名です。そして当時、魚のしるしは、キリスト者たちの集会所や彼らの墓地を示すいわば暗号としてよく用いられました。ギリシア語の魚(ἰχθύς)を、イエス・キリスト(Ἰησοῦς Χριστός) 神の子(Θεοῦ υἱός) 救い主(σωτήρ) の象徴として使ったのです。現代のカトリック信者は、ミサの象徴がパンとぶどう酒ではないことを、不思議に思うかもしれません。しかし聖書によれば、イエスが実際にパンと魚で群衆を養われた記録があり(マコ 6:34-44, 8:1-9)、このため初期の伝承において魚は重要な位置を占めたようです。

イエスの復活の物語りが教会で語られ、とくに洗礼志願者たちに教えられたとき、それらはただの事実の報告としてではなくて、教育的な意図によって再構成されて語られたに違いありません。このヨハネ福音書のテキストも、恐らく、イエスが弟子たちを「人間をとる漁師にしよう」(マコ 1:17)と言われたガリラヤに起源する伝承に由来し、ルカ 5:1-11 と何らかの関係がありそうです。

v.9 「さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。」

ここには、イエスの復活の事実の迫真性とその生き活きとした力を体験している原始教会の姿があります。私たちの典礼書で、拝領前の信仰告白が唱えられるとき、この v.9 の感激が今もよみがえってきます。このミサで、主の宣教命令によって救われて全世界から集められた多くの(v.6,11)信者たちが、一つになります。ミサで何が起きているのかを、原始教会の信者たちはみな知っていました(v.12)。

昔から主日やいろいろな祝祭日には、ミサに集う信者たちがいつも特別に着飾って来るキリスト教の慣習の起源を、私たちは v.7 に見出します。それは世間的な意味での儀礼や、あるいは自分たちが楽しむためのものとは違う、“宗教的行為”と考えるべきでしょう。ミサは、私たちが“主にお会いする”特別な時であり、その意味で“キリスト者の生活全体の中心”(ミサ典礼書の総則 1)であるからです。

### 2. 黙

v.12 「屠られた小羊は、力、富、知恵、威力、誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい方です。」

v.13 「玉座に座っておられる方と小羊とに、賛美、誉れ、栄光、そして権力が、世々限りなくありますように。」

この世の中には、イエス・キリストの復活を信じられない人々、またその出来事が福音の中心的テーマであることを理解しようとならない人々が、たくさんいます。実際、キリスト教信者であると自認している人々の多くが、せいぜいイースターの日ぐらいしか復活の出来事、あるいは物語りに、心を向けようとはしないので

す。キリスト教の宣教における復活の使信の決定的重要性が、多くの人々に忘れられているのです。

多くの人々？ それは司祭と信者のことに外なりません。もし、私たちのミサがこの vv.12-13とは異質なものであり、その主たる関心の対象が別なところにあるとしたら、いったいどんな福音がそこで語られているのでしょうか。

イエス・キリストは、罪と死と悪魔に勝利された(Ⅰコリ 15:50-57、コロ 1:13、Ⅱテモ 1:10、Ⅰヨハ 3:8)という福音の使信が、再び明確に宣教されなければなりません。父なる神と復活されたキリストへの“勝利の賛美”が、再び私たちのささげるミサの中心主題とならなければなりません。

「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」(Ⅰコリ 15:54-55) 「しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。」(ロマ 8:37)

### 3. 使

vv.30-32 「わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました。神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右にあげられました。わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証しておられます。」

私たちは、この使徒たちの証言を聞くことが出来ることを感謝しましょう。今では成人した日本人で、字が読めない人はいないし、語り聞かせてくれる人がいなければ聖書を自分で読むことが出来ないなどという時代でもないのです。そうであれば、「私たちは、これほど大きな救いに対して無頓着でいて、どうして罰を逃れることが出来ましょう。」(ヘブ 2:3) 神に感謝。主に栄光。キリストに賛美。

ハレルヤ、アーメン。

## 4月25日 復活節第4主日

使 13:43～52 黙 7:9～17 ヨハ 10:27～30

### 1. ヨハ

v.27 「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。」

私たちが“信仰”について語るとき、それが“キリストの福音を聞き分ける”ことと切り離し得ない概念であることを、明確にする必要があります。

歴史の教会が決してそのように意図していなかったとしても、実際には多くの人々が幼児洗礼によってキリスト教徒となることによって、通俗的にはそれが“福音を聞くこと”としてではなくて、単に“教会への所属”を意味することであるかのように、安易に理解されて来たと言ってよいでしょう。

そこでは、信者が福音に無理解である責任は、教導職による教育指導の足りなさに帰せられて、しかもそのような教会の現状に誰も彼もがすっかり馴染んでしまっている、とすることが出来ます。とても v.27 のような言葉を、復活のキリストが聖書を通して私たちに語っておられる“現在の神のことば”として聞く、などということは恐ろしくて出来ない。だから、聖書を自分で読むことは避けて、司祭の“お話し”だけをありがたく聞いている、ということでしょうか。しかしこの v.27 で、復活のキリストは明らかに 出 20:18-21 を念頭に置いて、「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」(II コリ 5:17)と私たちに語っておられるのです。

### 2.

“キリストの声を聞き分ける”とは、“キリストの福音を聞き分ける”ことです。その福音とは、“既に・・・ただ一度・・・永遠に・・・成し遂げられた”(ヘブ 9:11-12)贖いの福音であって、「神はキリストによって世を御自分と和解させ」(II コリ 5:19)てくださったという知らせです。

この十字架の福音を“聞き分ける”こととは別な、あるいはそれに加えての“今の時代の新しいキリストの言葉”というようなものを期待するなら、それは全く見当外れなことです。

“キリストの羊”とは、罪と死と悪魔に勝利された“キリストの勝利の行進に連なる”(II コリ 2:14)者たちのことであって、もしこの福音を聞き分けることが出来ない人がいるなら、その人は“キリストの羊ではない”(10:26)可能性が大きいと言わざるを得ません。そのような人にとっては、聖書はただの恐ろしい書物でしかないことでしょう(マタ 13:47-50 参照)。

### 3. 黙

v.14 「彼らは大きな苦難を通過してきた者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。」

感謝の典礼の奉献文の中で、司祭が聖別の詞を唱え、パンとカリスが会衆に示されるとき、それは一同に、「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神

の賜物です」(エフェ2:8)ということをお願い起こさせます。この福音の賜物を“聞き分ける”ことに力点を置いて、このとき「小鐘を鳴らすことが“適当である”場合は少ない」と解説されています(土屋吉正/ミサがわかる p.137)。私たちが地上でささげるミサは、この黙7章に描かれた壮大な天の礼拝の「写しであり影であるもの」(ヘブ8:5)なのです。

#### 4. 使

キリスト教の宣教が、その本来の意味で進められるとき、神のことは(キリストの福音)を“聞き分ける者”と“理解しない者”とが別けられます。前者は神の恵みによるのであり、後者はその恵みを拒む不信仰によって「自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている」(v.46)のです。

今年の2月に「カトリック教会のカテキズム要約」が日本語に翻訳されて出版され、これを用いての勉強会が諸教会で始まっていることは、大変喜ばしい現象です。これを一つの突破口にして、信徒が聖書と聖伝への関心と理解を深めるようになってほしいものです。カテキズムは、あくまでも聖書と聖伝の解説書であって、どれほどよく出来ていても、決してそれに取って代わるものではないからです。

聖書の代用品、聖伝の代替品がないように、キリストの言葉の代用品や代替品は決して存在しません。カテキズムの編纂者である教導職は、「神のことはの上にある者ではなく、むしろこれに奉仕し、伝えられたことだけを教えるのである。」(神の啓示に関する教義憲章 10) このことをわきまえて学ぶことにより、多くのカトリックの子らが「主の言葉を賛美」(v.48)する者になって、栄光が神にささげられますように。

ハレルヤ、アーメン。